



愛光NEWS

2020年3月

2020（令和2）年4月17日発

（編集）愛光本部総務部

（TEL）043-484-6391

（メール）<http://www.rc-aikoh.or.jp/>

今年の桜の開花は観測史上最も早かったとか。そのまま散ってしまうのかと思いきや寒の戻りで長い間咲き誇っていました。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で、とても花見気分にはなれなれなかったのが現実でした。来年はじっくりと桜を愛でたいと思います。

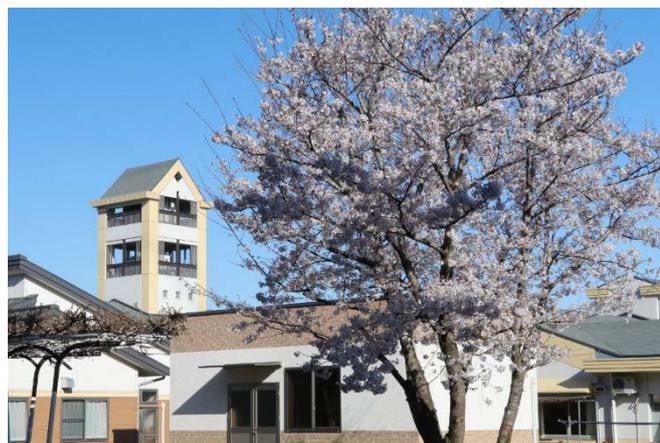
感染拡大が続く新型コロナウイルス感染症は、とうとう緊急事態宣言が発令されました。千葉県内の障害者施設では、多数の職員、利用者が新型コロナウイルスに感染する事例が発生しています。市内の高齢者事業でも感染者が発生しています。とても他人事ではなく、不測の事態が起きないよう法人内でも感染予防策を徹底していますが、見えないウイルスの不安は尽きず、緊張感が続いています。少しでも明るいきざしがあるといいのですが・・・

□事業経過など（2020.3.1～）

月/日(曜)	記 事
3 / 2(月)	予算事業計画調整会議／業務執行理事会
5(木)	昇進予定者面接／予算事業計画調整会議
9(月)	施設長会議／試用期間終了面接・2021年度採用試験
10(火)	業務執行理事会
11(水)	A I K O H情報版（法人内情報発信：新型コロナ対応・休業手当など）
12(木)	世界保健機構（WHO）新型コロナウイルス「パンデミック」表明
14(土)	理事会
14(土)	桜開花宣言（東京）
16(月)	「やまゆり園事件」元職員植松容疑者に死刑判決
20(金)	春分の日
24(火)	東京オリンピック・パラリンピック1年程度延期決定
25(水)	施設長会議
26(木)	業務執行理事会
28(金)	千葉県内障害者施設新型コロナウイルス集団発生
30(月)	A I K O H情報版（新型コロナ情報発信）
4 / 1(水)	辞令交付式／新任職員研修（～3日）
7(火)	政府新型コロナウイルス関連で緊急事態宣言発令
8(水)	千葉県新型コロナウイルス関連で緊急事態措置発令

□これからの予定

新型コロナウイルスの関係で、行事イベント等は自粛しています。



■おもな出来事

□理事会・評議員会報告

3月14日（土）理事9名（1名欠席）監事2名の出席により、第7回（通算295回）理事会が開催されました。主な議案は次の通りでした。

- ① 2019年度補正予算案（承認）
- ② 2020年度事業計画案、予算案（承認）
- ③ 管理職員人事（承認）

業務報告では、新型コロナウイルス感染症の対応で、感染者発生時のフローチャート作成や外出行事等の自粛中止による利用者のストレス解消のための施設の取り組みへの質問がありました。フローチャートは、理事会終了後すぐに作成、利用者のストレス解消は感染予防策を実施しながら工夫して取り組みます。

3月22日（日）開催予定の評議員会は、新型コロナウイルス感染症の影響で開催を中止させていただきました。それに伴って、議案を評議員の皆様へ送付し、提案事項に同意をいただくという措置をとり、全員の皆様から同意をいただきました。非常の事態にご協力いただきありがとうございます。評議員会の議案は、①2019年度補正予算案 ②2020年度事業計画案、予算案でした。

□「津久井やまゆり事件」が残したもの

2016年7月、利用者19名が殺害され職員を含む26人が重軽傷を負った事件の裁判員裁判は、3月16日死刑判決が言い渡され、植松被告の控訴取り下げで3月31日死刑が確定しました。障害者への差別や偏見から生まれた理不尽な犯行でしたが、裁判は、何故犯行に及んだのか等明らかにされず不明瞭に終わった感が拭えません。全国紙も次のように伝えています。

- ① 朝日新聞：審理では、差別発言を繰り返した被告の動機の根底は十分探られず、後味の悪さが残った。公判で最も注目されたのは、被告の差別意識がいつどこで生まれ、なぜ動機につながったのかを解明すること。しかし被告がどのように育ったのかという点すらほとんど審理されなかった。社会の教訓につながるような内容はなく・・・被害家族は釈然としない思いを抱え続けるだろう。
- ② 読売新聞：障害者福祉施設で働きながら、被告がどのようにゆがんだ考えを強めていったのか。遺族を始め、多くの人を感じた疑問に答える審理が行われたとは言い難い。裁判では、大半の被害者の氏名が匿名で審理された。偏見にさらされることを懸念する被害者側に配慮した措置だ。被害者の家族の一人は「障害者への周囲の視線は冷たいままだ。特定されたくない」と打ち明ける。・・・何の落ち度もない被害者が、差別を恐れて匿名に追い込まれる。こうした現実を社会は重く受け止める必要がある。・・・社会に潜む差別意識を払拭する努力がかかせない。
- ③ 毎日新聞：事件を聞き、我が事として恐怖を感じた障害者や家族は少なくない。より弱い立場の人に向けられる差別的な視線を、肌で感じているからではないか。・・・この事件を特異な人間の凶行と片付けてはならない。被告と接見を続けた専門家があり、その見方も参考となる。事件が起きた意味を社会で考え続けていく必要がある。
- ④ 東京新聞：決して強者でもないのに弱者の中から「不要な命」を選別し、大量殺人を犯す。あまりに飛躍・逸脱した犯行をどう説明したらいいのか。今も社会にはびこる差別や偏見とどう関係するのか。障害者も人間であり、その権利を尊重するのは社会の共通した価値観ではなかったか。あるいは格差が進む日本社会では「人間は平等」「人権」という価値観も揺らぐのか。事件はいまだ不可解である。

□異例の辞令交付式

4月1日（水）新任職員10名を迎えて辞令交付式が行われました。例年だと会場には一般職員も同席して新任職員を皆で歓迎するところですが、本年は新型コロナウイルスの影響で参加者は幹部職員のみ、座席も広い間隔をあけてという異例の設定でした。西原理事長からは、「新型コロナウイルス感染拡大による外出自粛で、休校になった子供たちが公園で遊ぶ姿や在宅勤務になったサラリーマンが家族で過ごす時間が増えた。コロナショックで失うものもあるが、古き良き日本にあった光景、人とのコミュニケーションを思い出すきっかけでもある。こんな時こそ福祉の原点に戻り、対話のある社会、輝く福祉の第一歩となるよう皆さんと頑張っていきたい」と歓迎の挨拶がありました。池田副理事長からは、新任職員に向けて「同じ障害を持つ人高齢者によって、それぞれの生活における障害の意味や生き方はみな同じではない。生活、人生はつねに個別的、可変的である。生活に関わる援助には、つねに変わらない正しい答えはない。このような意味で社会福祉は“ゆらぎ”があり、ゆらぎを避けて通れない。決して援助者が自身の考えに固執し、それを利用者に押しつけることのないように」と話がありました。辞令がそれぞれに交付された後で、新任職員代表挨拶としてリホープ配属の坂尻新任職員から、今後に向けた力強い誓いの言葉がありました。

□「あいとひかりのコンサート2020」の開催中止

愛光後援会「愛の灯台基金」主催で6月13日（日）開催予定の「あいとひかりのコンサート2020」は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で中止としました。今回初めての試みで児童向けイベントとして劇団飛行船「ロビンフットの冒険」を予定していましたが、緊急事態宣言が発令され、断念せざるを得なくなりました。次回に演目を含めて改めて検討することになると思います。楽しみにされていた皆様には、心よりお詫び申し上げます。

■月報から

□新型コロナウイルス対応（ルミエール）

施設内でも職員が「持ち込ませない」ために継続して消毒等対応策を徹底している。それでも日々社会情勢が変化している中で、複数の短期入所キャンセルの連絡があった。施設に対して気遣ってくれる言葉も多く、これからも利用者のご家族の期待に応えられるよう短期入所の受け入れに取り組んでいきたい。また、施設利用者のご家族からも連絡を受け、施設内と利用者の状況を報告して安心してもらおうと同時に多くの励ましの言葉もいただいた。

（ルミエール課長 原宏之）

□不安と懸念

インフルエンザやノロウイルス感染、風邪症状は、数々の症例経験から予測ができる。だが新型コロナウイルス感染症は、日常生活に制限を強いられ、かつ経過も不明瞭であるためその影響について現場職員から不安の声が聴かれている。マスク装着や手洗い、換気、消毒等感染予防策を万全にと、一人ひとりが自覚しできる範囲で実践している。また、普段から十分な睡眠とバランスの良い食事を心がけ免疫力を高めることも推奨されている。しかし、新型コロナウイルスという正体不明な感染症との長期的な戦いが予測される中、利用者にとっては不自由さのみが感じられ、現実起こっていることへの理解が難しい状況にあることが容易に想像できる。今後、精神的なストレスを抱える利用者や家族、職員を含めて健康管理センターとしてどのような関わりや必要な支援が提供できるかを課題として考えたい。

（障害者支援事業部健康管理センター 看護主任 佐藤綾子）

□学童保育所は土曜日開所！

新型コロナウイルス感染症防止策の一環として、週末の不要不急の外出の自粛要請が発せられた。この趣旨に則って、「学童保育所の臨時閉所」も検討の余地があると思われたが、実際は厳しい現実がある。外出自粛でも通常どおり土曜日も12時間開所し、週6日終日開所する状況に変わらない。

4月を迎えてスタッフの入れ替わりもあり、支援員が少ないので、総出で毎日フルタイム勤務！交代で休むことも難しい。運営の人出は綱渡り状態である。・・・本来は、専門家会議が指摘するように「10人以上の集まり」を作らずに運営したいのだが、そのためには場所と人員の確保が不可欠である。これを可能とするためには、今のところ学校の施設と人を活用させていただく以外の手はなさそうではある。校舎の中は子どもがいなくてガラガラなのに、学童保育室はギュウギュウ状態である。大変な状況ではあるが、保護者からの感謝の言葉や励ましの言葉を支えに、子どもたちのため、保護者のために、私たちは一丸となって社会的使命を果たしているのだと自負しているところである。

(地域福祉事業部長 吉田 信之)

□臨時休館～3月2日から当面の間

3月1日(日)、開館最終日、まるで永遠の別れかのように「児童センターの偉大さがよくわかりました。本当にお世話になりました」と、深々と頭を下げて帰っていくパパ。「最後だから、一日あそびたい。ここって楽なんですよ」と、感慨深げなママ。来館者数は、通常の半分以下で43名だった。

児童センター玄関前のロビーは、定例の休館日でも、ゲームやスマホをしている子どもたちの居場所となっていた。ロビーに窓はなく換気ができないため「密」な空間となってしまう。休館中は、テーブルやいすを一か所にまとめてパーティションで区切り、滞在しないように模様替えをした。休館になって初めての土日、自粛するよう学校で指導されているのか、児童センター周辺には子どもたちの影すらなかった。最近来館し始めた中学1年生のみつ君(仮名)は、ここ3か月、両親に夕飯を用意してもらえないとこぼしていた。臨時休校になり、給食がない生活。どうしているのだろうか・・・心配の種はつきない。

(児童センターインストラクター 鈴木 信子)

□制度の狭間で

「高次脳機能障害の診断、年齢69歳で介護認定では要支援1だが介護保険のデイサービス利用にはそぐわないような方がいて・・・」という相談を地域包括支援センターから受けた。ご本人と奥様、包括センターのスタッフで話し合いの場を持ち直接お会いしたところ、定年後も活発に運動などをしていたそうで若々しい印象の方であった。事業所見学をした後、ご本人も含め、皆がデイサービスよりは活動量が多く、能力を活かす余地のある“ワークショップかぶらぎ”で過ごすほうがよいだろうという結論に至った。制度の狭間のケースではあったが、より今の本人にあったサービスを選択できたのではないかと思う。

(ワークショップかぶらぎ主任 宮部 和樹)

■職員状況(3/31現在)

	人数	前月比
正職員	160	
サポート職員	43	
非常勤職員	148	+2
計	351	+2

○採用 2名(非常勤職員)